

ユネスコ世界遺産ティカル ～北のアクロポリスプロジェクトと遺跡の保存・活用～

多々良 穰

人間社会環境研究科 博士後期課程1年

1. はじめに

平成24年度の文化資源学フィールドマネージャー養成プログラムにより、マヤ文明関係については、3名が中央アメリカに派遣された。そのうち筆者は、8/3（金）～8/31（金）の29日間、グアテマラにおける「金沢大学ティカル遺跡北のアクロポリスプロジェクト（以下金沢大学ティカルプロジェクト）」への参加と、隣国メキシコのメリダを拠点とした「世界遺産の現状視察および建造物装飾の写真撮影」を行った。

本報告では、前者に焦点をあて、金沢大学ティカルプロジェクト発足の経緯と今回の活動内容、世界遺産ティカルの現状と問題点、そして今後の展望について述べたい。



写真1 神殿4から見た神殿群

2. プロジェクトの概要と目的

(1) ユネスコ世界遺産ティカル国立公園

ティカル国立公園の位置するグアテマラは、マヤ文明遺跡の宝庫であり、中央アメリカの中部に位置する。同国北部ペテン県にあるティカルは、1979年に文化遺産および自然遺産を兼ねた複合遺産として登録された。マヤ文明に属する文化遺産は、メキシコ・グアテマラ・ホンジュラス・エルサルバドルの4か国に計8か所あるが、唯一の複合遺産である（多々良2008）。今から約300年前、偶然スペイン人神父がジャングルに迷い込んでティカルを見つけたようだが、正式な発見は1848年である。その後1956年にアメリカのペンシルヴァニア大学博物館によるティカルプロジェクトが開始され、14年にわたる本格的な発掘が実施された。外国の大学プロジェクトによるティカル調査は、本学が世界で2例目となる。

ティカルは古典期における中心都市であり、最盛期には100km²以上の面積を誇る都市であった。碑文解読の結果、紀元1世紀頃から10世紀頃までに、少な



写真2 神殿35

くとも33人の支配者の存在が確認されている（Simon and Martin 2008）。現在は遺跡公園として年間20万人を越える観光客を迎え、神殿1・神殿2を中心とするグランプラザ、もっとも高くそびえ、そこから望む神殿群の景観で有名な神殿4（写真1）、スペイン人によって発掘された神殿5、その他に七つの神殿や失われた世界などが人気を集めている。なお、グランプラザの北側に位置する神殿35が、本学によって発掘さ

れる予定の建造物にあたる（写真2）。

（2）金沢大学ティカルプロジェクト発足までの経緯

金沢大学ティカルプロジェクトは、2012 夏に開始されたが、これにつながる活動は7年前にさかのぼる。グアテマラ政府は、ティカルの保護・活用のために、2004 年から5 年間にわたるティカル国立公園マスタープランを作成した。日本政府はそのプランの目標の一つである文化財の保存と修復を行う施設および体制の整備に貢献するため、平成21 年度一般文化無償資金協力において、ティカル国立公園文化遺産保存研究センターを建設することを決定した。そしてグアテマラ市において、日本の駐グアテマラ国大使とグアテマラ外務大臣との間で、グアテマラに対する5 億4,820 万円を限度とする一般文化無償資金協力「ティカル国立公園文化遺産保存研究センター（以下ティカル保存研究センター）建設計画」に関する交換公文の署名式が行われた（外務省HP 2010）。そしてついに、2012 年7 月6 日、ティカル国立公園において、長崎輝章駐グアテマラ大使とペレス・モリーナ大統領及びバツィン文化スポーツ大臣との間で、「ティカル保存研究センター建設計画」の引渡式が実施された。つまり、保存研究センターが完成し開所式が行われたのである（在グアテマラ日本国大使館HP 2012）。本年は、マヤ暦の周期が終了する区切りの年ということもあり、ティカル保存研究センター建設計画に対する日本の援助、及び本件引渡式の実施は、グアテマラのテレビでもニュースとして中継され、大きな注目を浴びた。

一方、グアテマラ政府からの要請により、2005 年度から国際交流基金文化協力事業として、4 年間にわたりティカル国立公園やキリグア遺跡などの現状診断調査と協力可能性調査が行われてきた。この中心となったのが、現在本学国際文化資源学センター教授となった中村誠一氏である。そして前述の「ティカル保存研究センター建設計画」が決定され、日本の大学・研究機関の代表として選ばれたのが金沢大学であった。そして2011 年6 月、本学国際文化資源学センターはグアテマラ文化スポーツ省文化自然遺産副省と「交流協定書」を締結し、同時に「覚書」を本学人間社会研究域と文化自然遺産副省の間で締結したのである（中村による私信 2012）。その「覚書」に基づき、7 月にティカル保存研究センターが開かれていち早くラボラトリを利用して発足したのが、金沢大学プロ

ジェクトなのである。このように中村氏の功績は本学にとどまらず、日本のマヤ文明研究において非常に大きなものであった。

（3）ティカル保存研究センター

このティカル保存研究センターは、文化遺産を保存のための拠点となる施設として建設された。当然その目的は、文化遺産の適正な保存・修復及び研究活動を行うためである。

そのためには、日本とグアテマラを初めとするマヤ地域各国の文化遺産を巡る共同研究と人的・学術的交流が必要である。そのための場としてこのティカル保存研究センターは存在意義がある。また、グアテマラを初めとするマヤ地域各国の人材育成を支援するとともに、グアテマラだけではなく国外からの旅行者に対して教育・広報を行うことも大切な目的である。

ティカル保存研究センターには、収蔵・調査研究・保存修復・教育普及部門がそれぞれ置かれている。正面玄関を入ると右側には講堂があり、講演を聴けるようになっている。正面に中庭を見て（写真3）、左側



写真3 ティカル保存研究センターの中庭



写真4 センター外部の雨水貯水タンク

にはガラス張りのラボラトリがあり、訪問者が仕事内容を見学できるようになっている。実演用の部屋の奥にもう一つラボラトリがあるが、その部屋は筆者たちが仕事をするスペースである。今回の金沢大学プロジェクトでは、その部屋で調査準備をしたり、仕事内容の確認をしたりするために利用させていただいた。複合遺産つまり自然遺産らしく、雨水利用による節水機器（写真4）、自然通風と地中予冷による空調や換気扇、太陽光発電、太陽光を自然に取り入れる照明はまさにエコ設計である（桜井 2011）。中庭の右側には展示ロビーがあり、簡単な説明といくつかの遺物が展示されている。中庭の奥の部屋は一般公開されていなかったが、遺物収納用の部屋がある。その他、会議室や写真撮影用のスペースもある。ティカル保存研究センター内には、文化財保存・撮影記録・収納・測量製図用の機材が置かれており、設備は十分すぎるくらいである。

筆者が実際確認したところ、収納庫はまだスペースが余っている状態であった。ティカル遺跡からは、陶器や石彫などの貴重な文化財が数多く発掘されてきたが、それらはまだ古い収納庫に詰め込まれた状態で眠っているはずである。少しでも早く、それらの遺物を整理・登録し、新たに建てられたティカル保存研究センターにうまく収納すべきであろう。また、人材育成の観点からも、政権交代のたびに人員を交代させるのではなく、センターの維持管理を担当する継続的な人員配置が求められる。

3. 金沢大学ティカルプロジェクト

金沢大学ティカルプロジェクトの目的は、北のアクロポリスを対象として文化資源を総合的に研究することである。今回の筆者の役割は、そのスタートラインに立つべく準備とその整理であった。日誌をもとに、2012年夏の金沢大学ティカルプロジェクトの職務内容を簡潔に振り返ってみたい。

(1) フィールド日誌

筆者のプロジェクトへの参加期間は、実質 8/6（月）～21（火）の平日であった。以下をご覧ください、いかに天候不順で休みが多かったかがわかるだろう。

8/5（日）プロジェクトの準備

8/6（月）関係者への挨拶回り、

神殿 35 およびグランプラザの位置確認

8/9（木）グランプラザ（神殿 35 のある広場）の試掘および実測図作成

PANT-REG1

8/10（金）グランプラザの試掘および実測図作成

PANT-REG2（写真 5）・REG3

8/15（水）「失われた世界」の試掘（一部）

PANT-REG4・REG5 の各 1 層目

8/16（木）「失われた世界」の試掘（確認のみ）

PANT-REG4・REG5 の各 1 層目

8/20（月）「失われた世界」の試掘および実測図作成

PANT-REG4・REG5

8/21（火）プロジェクトの引継ぎ事項の整理・確認

(2) ティカル国立公園との関係強化

筆者の最初の重要な仕事は、プロジェクト初日にティカル遺跡公園関係者に挨拶回りをするのであった。これは中村誠一教授がティカル保存研究センターの開所式に出席されて以来、初めて金沢大学関係者がティカルを訪れるからである。ともにプロジェクトの仕事をする共同ディレクターのアレキサンデル・ウリサル氏はもちろん、ティカル国立公園の最高責任者であるオズワルド・ゴメス氏、ティカル保存研究センター責任者であるエリザベス・マロキン氏、その他管理部長や副部長、考古学スタッフに、自己紹介しながら顔と名前を覚えてもらった。JICA のボランティア隊員である今泉和也氏も同行してくれ、金沢大学



写真 5 試掘坑 PANT-REG2 の実測風景

プロジェクトについて説明してくれた。

なお、「ティカル保存研究センター」を建設した徳倉建設関係者がティカル遺跡を訪れた。筆者がティカル遺跡を訪れるのは、今回を含めて3回目だが、筆者が知る範囲で、これまでのプロジェクト発足の経過、「ティカル保存研究センター」の活用、ティカル遺跡の説明などを行った。徳倉建設からは、現在金沢大学プロジェクトが使用しているラボラトリ兼会議室も提供していただいている。

(3) 神殿 35 の測量準備 (試掘坑)

ティカルの北アクロポリスは、ペンシルヴァニア大学が発掘調査を行い、報告書を出版している区域である。しかし、マッピングした際の基準点の正確さが曖昧であり、今後金沢大学プロジェクトが発掘を計画している神殿 35 の部屋部分も実測図がすでに掲載されているものの (Coe 1990: Fig.152-153)、階段部分は土と木に覆われ、発掘されていない。そのため、金沢大学プロジェクトでは正確なGPS統制基準点 (以下基準点) を設置し、北のアクロポリスの一つである神殿 35 の測量をやり直す計画である。その基準点を打ち込む際にどのポイントが妥当なのかを調べるため、50×50cm の正方形、深さ 35cm の試掘坑を設けた。床面が出てくれば、そこに基準点を設置することはできないからである。幸いどのポイントからも床面は検出されず、その周辺に基準点を設置できることが確認された。

では、その基準点設置について報告したい。まず、北アクロポリス全体に今後使用できるように、3点の試掘坑を設けた。北のアクロポリスに向かって右側手前に PANT-REG1、北アクロポリスのテラス上に向かって右側に PANT-REG2、向かって左側に PANT-REG3 を掘った。以下、実測図の記述より転記したものである (実測図は現地の金沢大学プロジェクトラボに保管してある)。

• PANT-REG1

地表面：ほぼ 10cm 深、
こげ茶色、しまりはやや弱、小石なし
第2層：ほぼ 20cm 深、
ただし南面と北面は上下幅が大きい
茶系色、しまりは弱くさらさら、
小石が少々
第3層：ほぼ 20cm 深以降、

第2層同様に南面と北面は上下幅大きい

白茶系色、粘性のある石灰質土、
細かい砂利が少々

底面：中央部はシルト、周辺部は石灰質土

• PANT-REG2

地表面：ほぼ 10cm 深、
こげ茶色、しまりは強くやや粘質、
小石なし

第2層：北面に白色系の石が多い

白茶系色、しまりは強くやや粘質、
白色系の石を含む

底面：白色系の石が数か所

• PANT-REG3

地表面：10～15cm 深、
こげ茶色、しまりは強くやや粘質、
小石なし

第2層：白茶系色、しまりは強くやや粘質、
白色系の石を大量に含む

底面：白色系の石が大きく5か所、
底面積の半分が石

また、将来的に発掘調査が広い範囲においてできることも考慮し、「失われた世界」にも基準点を2か所設けることにした。

• PANT-REG4

地表面：10～12cm 深、
こげ茶色、しまりは弱くさらさら、
小石なし

第2層：白茶系色、しまりは中くらいで粘質、
白色系の石を大量に含む

底面：白色系の石が大きく4か所、
その他 1cm 大の石が多数

• PANT-REG5

地表面：10～12cm 深、
こげ茶色、しまりは弱くさらさら、
小石なし

第2層：白茶系色、しまりは中くらいで粘質、
白色系の石を含む

底面：白色系の石が大きく4か所 (写真6)



写真6 PANT-REG5の底面

(4) 神殿35の測量

筆者の金沢大学プロジェクト参加期日内には、神殿35(写真2)の測量までは行きつけなかった。それは、グアテマラの国土地理院がティカルにやってくるのが遅れ、基準点の設置が間に合わないという事情もあった。雨季による気候不順も大きく影響した。午前中に試掘が完了しても、写真撮影や図面実測を終える前に豪雨に祟られた日が多かったため、なかなか計算通りに基準点の設置のための試掘を終えられなかった。調査そのものが中止になった日も、合計5日間あった。しかし、手間がかかるとはいえ、国土地理院が来訪する前からトータルステーションを使って測量点を取ることは不可能ではなかった。基準点を設置する前に神殿35の計測をし、後日測点を計算し直して図面をつくる方法もあったからである。個人的には、少しでも神殿計測に貢献したいという思いが強く、残念であった。

筆者がティカルから引きあげた後、金沢大学院生2名がティカル入りし、神殿計測を行った。

4. 世界遺産ティカルの現状と問題点

本来ならば、本論では「調査の成果」を記すべきであるが、先に述べたように、今回の活動は北のアクロポリスを実測するための基準点を設置することが目的であった。したがって、目に見える成果があったわけではないため、ここでは調査地ティカルを訪れて筆者が感じた問題点について述べたい。

(1) 展示方法

現在、ティカルには2つの博物館がある。駐車場手前にある「石彫博物館」と観光案内所の奥にある「ティ

カル博物館」である。いずれも外国人からは10ケツアル(約100円)を入場料として徴収している。しかし、博物館のそれぞれの特色を案内したパンフレットのようなものは存在せず、ツアーで参加している多くの観光客は素通りの状態である。しかも、考古学に関心のある観光客でも、どちらを見学すべきか、もしくは両方見るべきなのか迷う場合が多いと思われる。現在は開店休業状態の「ティカル保存研究センター」も、これに加わることになる。前述したように、「ティカル保存研究センター」にも展示スペースがあり、この3か所をどのような形で観光客あるいは一般人に見せるかは、単なる観光の問題ではなくマヤ文明の啓蒙教育の上で重要である。個々の博物館にはそれぞれの成立の経緯があることは承知しているが、やはり観光客の立場からすれば、3つを統合する方向で考えていくべきではないだろうか。少なくとも、博物館や展示物を整理していかないと、せっかくの考古資料が宝の持ち腐れである。

現状で1つ付け加えるとすれば、「石彫博物館」の展示方法である。広い空間を贅沢に使い、貴重な石碑が並べられているが、倒れた石碑はそのまま横たえてあり、それぞれの石碑の説明がほぼないに等しい。石碑の名称と刻まれている暦が書いてあるだけである。これでは、石碑に何が書いてあるのか、どのような意味で重要なのか、観光客にはわからない。しかも、解説書が置いてあったり売られたりしていれば救われるが、そのような様子もない。

3つの博物館および展示スペースも含め、新たな「ティカル保存研究センター」設立を機に、本気で考えてみる必要があるだろう。

(2) 観光客に対する導線

広いティカルを見学するには、やはり手元に地図を持ってほしい。地図はチケット売り場から数百メートル行くと大きな看板があるが、これ以外は小さな矢印のついた標識が遺跡公園内の数か所にあるだけである。チケット売場や遺跡入口にはパンフレットも用意されているが、高い入場料も払わせているので、あまり購入する人は見受けられなかった。そのパンフレットについても、ただ地図だけを載せればよいというわけではなく、それぞれの見どころを、簡単な解説をつけるべきである。1年以上前に、パンフレットを作り直すために写真や文章、地図の精度を確認したが、新政権になってからは動きが見られず、作業がまったく

生かされていない（今泉による私信 2012）。

ティカルは1か所にまとまって見学することができず、いくつかの見学ポイントが散在している。オーソドックスな見学ルートとしては、セイバの木、神殿1と神殿2があるグランプラザ、神殿5と七つの神殿を経由して「失われた世界」、そして神殿4に至り、階段を登ってティカルの神殿群を眺めるといったものだろう。しかし、これも地図を片手に行かないと、標識だけを頼りに訪れるのは難しい。しかも、建築複合PやQも回るとなると、時間がどのくらいかかるか不明であるし、大体の距離と時間が示してあるとお丁寧であろう。

なお、余談になるが、「失われた世界」の標識が、一部「Lost World」ではなく「Lost Word」となっていた。言葉を失うくらい素晴らしいという最高級のジョークではないだろうから、誤りを修正すべきだろう。

（3）治安の問題

神殿6については、距離も長くあまり観光客が訪れないらしい。筆者のようなある程度慣れた者に対しても、ガイドをつけずに行くことは勧めていないようである。また、建築複合Qの方向に行く道は、ティカルから23kmほど離れたワシャクトウン遺跡に行く方向だが、ワシャクトウンにつながる道はその後一本道となり、強盗に襲われる可能性が高くなるのだという。残念ながら筆者は断念しており、ティカル国立公園内も含めて警備体制を強化することが大切である。各ポイントに警備員を配置することが望ましいが、経済的問題がからむだけに、この治安問題の解決は容易ではないだろう。

（4）安全面強化とのバランス

現在のティカルでピラミッドに登れるのは、神殿4と「失われた世界」のピラミッドの2つである。2011年まで登ることができた神殿5、そしてグランプラザにある目玉の一つで2012年春までは登ることができた神殿2は、現在登ることができない。確かに神殿5と神殿2の階段は、板が取れかかっている箇所があるなど、老朽化が否めない状態だった。しかし、現在この公園の最高責任者であるオズワルドになってから、立て続けに階段が取り外されており、安全面重視の保守的政策のように思える。神殿2は、壁の塗り替えなどの補修作業に入っているが、これが終わっても新たな階段のつけ替え工事は予定されていないという（ウ

リスルによる私信 2012）。観光客のニーズに応えるべく、安全の確保と遺跡の観光推進とのバランスをうまくとりながら、資金を投入して早めに神殿5と神殿2の階段を取りつける方向で検討してほしい。

（5）建造物の修復・保存

上述した階段よりも大きく根本的な問題は、建造物そのものの修復・保存の問題である。

ティカルでは、石造建造物の材料である石灰岩の浸食が進行していることが大きな問題となっている。浸食がひどい状態の場合には、石材自体を交換する方法を用いているが、これは予算や労働力だけの問題にとどまらず、資源の面で持続可能な方法とは言えない（中村 2007）。すでに多くの建造物が崩れかかっており、崩落を食い止める作業が急務となっている。

また、貴重な石彫などの遺物も、破壊の危機に直面している。北のアクロポリスを訪れると多くの観光客が見学する神殿33の漆喰塗りマスクは、簡単な屋根によって雨風をしのいでいるが、40年前の発見当時の状況と比べると、全体がカビのようなもので黒ずんでしまっている。このままでは劣化する一方であり、科学的方法が模索されている。

5. 今後の課題・展望

本論では、金沢大学プロジェクトとそれに関連する状況について述べてきたが、将来的にどのような課題があり、どんな方向に文化資源を活用していくかについて最後に簡単にまとめてみたい。

本学の「文化資源学フィールドマネージャー養成プログラム」は、「多様な文化の存在を尊重し、多文化共生の未来社会を築いていくために、ローカルな文化のグローバルな活用策を考えマネージできる人材を育てる」ことを目的としている。つまり、将来的に文化資源に携わる人材育成を行うわけであり、今回の研修を今後の活動につなげていかなければならない。2013年3月に再度ティカル調査に参加する予定なので、8月に行った作業がどこまで進み、今後どのような調査ができるのか、プロジェクト責任者の中村誠一氏とアレキサンデル・ウリスル氏の指示を仰ぎながら進めていくことになる。

また、金沢大学プロジェクトの枠だけで終始するのではなく、世界遺産ティカルにおいてどのように貢献できるのかを考える必要がある。金沢大学プロジェク

トが新設されたばかりの「ティカル保存研究センター」のラボラトリを使用していることは、単なる間借りではなく、このセンターの目的にかなう活動だとみなされていることを重視すべきである。すなわち、マヤ地域の文化遺産を巡る共同研究、マヤ地域の人材育成に対し、本学は貢献する義務を持っている。では、展望として今後本学が行っていくべき分野は何であろうか。それは、保存研究センターの建設に際して設定された4部門と同様のもの、すなわち収蔵・調査研究・保存修復・教育普及ということになるだろう。

特に筆者がここで述べたいのは、教育普及に関する問題である。20年近く高校教員をやってきた経験から、遺産の重要性を住民に啓蒙・教育していくことについて、大いに関心があるからである。

2012年はマヤ長期暦と終末思想が結びつけられ、世界的にマヤ文明が話題に取り上げられることが多かった(多々良 2012)。そのことを契機にマヤ文明に興味を持つ人も多かったことは事実であり、あらためてマスコミの力を再認識することになった。だが、観光やそのための宣伝が先行し、遺跡そのものの魅力や重要性、そしてその意味が取り残された。その結果、「世界滅亡の日」とされた2012年12月21日には、ティカルをはじめとする多くのマヤ遺跡でイベントが行われ、その結果遺跡公園の環境が荒らされただけでなく、建造物の一部が破壊された。特にティカルでは、神殿2の一部が損傷し、修復不可能な箇所もあるという(今泉からの私信 2012)。

大がかりなイベントが終わり、急激にマヤ遺跡への熱が冷え込む事態も十分予想される。しかし、注目されたマヤ文明だからこそ、イベント後の遺跡の実態を広く知らしめるべきだろう。特に現地グアテマラの人々に自分たちマヤ人の歴史の尊さを認識してもらい、文化資源を自分たちの手で守っていくような啓蒙活動をしていく必要がある。筆者が入手した現所在地元の中学生在が使用している教科書を見ると、その内容はグアテマラや隣国メキシコ、ホンジュラスの主な遺跡紹介にとどまっている。それらのマヤ遺跡を中心にどのような遺跡公園が作られ、どのように保存・活用されているのかについて、少なくとも歴史の教科書では触れられていない。グアテマラ国自らがマヤ遺跡を保存していけるように、われわれ金沢大学ティカルプロジェクトが援助していくことが理想である。そうすれば、今回盛り上がった一過性のイベントがもたらした遺跡破壊が、いかに大きな問題であったのかを認識で

きるだろう。

謝辞

金沢大学ティカルプロジェクトに派遣されるに当たり、多くの方々にお世話になった。特に同プロジェクト責任者の中村誠一教授とアレキサンデル・ウリサル氏、JICA ボランティア隊員今泉和也氏、フローレスの下宿でお世話になったマヨール・シカラ一家には、この紙面をお借りして厚くお礼申し上げたい。

引用文献

Coe, William R. 1990. *Excavations in the Great Plaza, North Terrace and North Acropolis of Tikal*, Tikal Report No.14 Vol.IV. The University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Martin, Simon and Nikolai Grube. 2008. *Chronicle of the Maya Kings and Queens: Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya*, 2nd edition. Thames and Hudson, London.

桜井 敏浩 「グアテマラティカル遺跡訪問—遺跡保存のための日本の協力」『チャスキ』No.44、アンデス文明研究会、2011年。

多々良 穰 『ようこそマヤ文明へ』 文芸社、2008年。

多々良 穰 「マヤ文明と終末論の真実」、ナショナル ジオグラフィック日本版公式サイト、2012年。 <http://nationalgeographic.jp/nng/article/20121127/331996/>

中村 誠一 「ティカル発掘調査とマヤ文明の謎」『失われた文明マヤ』、恩田陸・NHK 「失われた文明」プロジェクト編、NHK出版、2007年。

「グアテマラに対する一般文化無償資金協力に関する交換公文の署名式について」、外務省国際協力政府開発援助 (ODA) HP、2010年。

http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/data/zyoukyou/h21/ipbm_100316.html

「平成21年度一般文化無償資金協力 ティカル国立公園文化遺産保存研究センター建設計画 引渡式」、在グアテマラ日本国大使館HP、2012年。

<http://www.gt.emb-japan.go.jp/TikalJA.htm>